

七項目にはそれぞれ事業費の目安があり、県と

川沿いに建設構想を持つ  
アユのテーマパーク。一  
九九〇年の漁業補償締結  
の際、河口堰建設の条件  
として長良川流域の七漁  
協が県に求めた七項目の  
水産振興策の中で、まだ  
実現していない最後の  
「内戻」。

の井上隆会長(七〇)は、細  
る予算に不安を隠さな  
い。

## 分断の代償

今年も、わずかながら  
県予算がついた。「あゆ  
パーク」建設推進費二十  
八万円。長良川河口堰(三  
重県桑名市)の運用が始  
まった一九九五年から毎  
年計上され、これまでに  
使われた県費は約四千六  
百万円。しかし、建設ど  
ころか、基本構想すらで  
きていないのが現状だ。

漁協側の確認書には「総額五十億円以上」と明記。中でもあゆパークの建設費は最も高い十五億円。それが迷走の始まりだった。

最初の計画地は、岐阜 市長良古津の長良川右岸。当時の県の構想案には十箇以上の敷地にアユの友釣りが楽しめる人工河川や水族館、水中のアユの気分を味わえる「疑似体験シアター」など十五億円を想定した華々しいイメージ図が並ぶ。しかし、施設で使う地下水が、揚水すると枯渇する」とが分かり、九七年に頓挫。県は二〇〇二年に長良川流域の市町村に公募をかけ、美濃市や関市など手を挙げた四八所の中から翌年、旧白鳥町の長瀧地区を選んだ。計画地は地元の交流拠点となつている「道の駅白鳥」隣接地。「建設費保してある」「二十二」

三億円はかけてもうえ  
ようだ」。巨額の目玉  
設誘致にさまざまなう  
さが広がり、地元の期  
は膨らんだ。

しかし、県の財政は年々悪化。水産振興策をとりまとめ、公共事業を推し進めた当時の梶原拓知事も代わり、県の姿勢が変わってきた。「もう少しコンパクトにできないか」「大きな箱物をつくっても、運営できなればお荷物になる」。県水産課の可児忠衛技術課長補佐は「十五億円の建設十年前に切った手形がま

らが早期整備を強く促す要望書も県に出した。

これまでに漁場整備や魚道設置などの水産振興策で使われた費用は五十六億円。県にとって「五十億円以上」の金額の「ノルマ」は超えた。しかし、アユやサツキマスの漁獲は低迷を続け、二年月には市や自治会長

# 「あゆパーク」



**上**あゆパークの建設構想がある  
「道の駅白鳥」の周辺。手前は長

下あゆパークの建設が盛り込まれ

当時の長良川流域の7漁協の組合長と、梶原拓知事が押印した

# 15億円構想 20年の迷走

らう」。井上さんはそんな夢を思い描き、他県の水産振興施設を視察。数百万円をかけ、町独自の構想案も練つた。

本構想案を県  
算規模に応じ  
八年には地元  
る」との思い  
決定はしてお

もらつてい  
が強い。○  
関係者が予  
た三つの基  
に提出。昨

している。しかし、その  
ツケはあまりにも大き  
い。分断の代償を前に  
もがく人間の姿を見詰め  
る。(山本真嗣)

けではない」といふを刺す。

△  
巨額のダムや堰で川を  
分断してきた人間が、再び巨費を投じて途切れたりながらを取り戻そうと

- | 「あゆパーク」構想の経過 |   |
|--------------|---|
| 1990         | 県と長良川流域の7漁協が水産振興対策に関する確認書を締結  |
| 95           | 岐阜市長良古津を想定した「あゆパーク」の基本構想策定。長良川河口堰稼働                                   |
| 97           | 地下水が枯渇することが分かり、長良古津での建設断念   |
| 2002         | 県が長良川流域の全市町村に「あゆパーク」の候補地公募。旧白鳥町長瀧（現郡上市）、同町大島（同）、美濃市横越、旧板取村保木口（現関市）が応募 |
| 03           | 県の候補地評価委員会が白鳥町長瀧に決定   |
| 04           | 基本構想の協議開始   |
| 07           | 県が地元関係者でつくる「あゆパーク」専門委員会設置。あゆパークの在り方を再検討                               |
| 08           | 地元関係者が予算規模に応じた3種類の基本構想案を県に提出  |
| 09           | 郡上市や長瀧地区の自治会長らが県に早期整備を要望  |

# 分断の代償

入り口は砂利と土砂で完全に埋まっていた。アユの遡上シーソン真っただ中の五月中旬。郡上市を流れる吉田川上流の二間手砂防えん堤左岸に設置されたコンクリートの魚道に、魚の気配はなかった。

砂防えん堤は高さ約八メートル。上流につながる魚道に、魚の気配はなかった。アユのようないい魚はえん堤を越えられない。魚道は幅二メートル、総延長八十五メートル。巨大な折り返し階段のような水路を上る仕組みだが、流れてきた砂利が入り口をふさぎ、機能していなかつた。

2►

## 上れない魚道



巨大な階段のような水路を上るように魚道が設計された二間手砂防えん堤。中央の魚道入り口が砂利で埋まっている=いずれも郡上市の吉田川で

さらに上流の奈良井砂防えん堤の魚道(幅一・五メートル、総延長百九メートル)は水路には水すら流れおらず、魚は上りようがない。えん堤には多量の土砂がたい積し、上流の魚道の出口(水の流入口)が詰まり、川は魚道と反対の左岸側を流れていった。

「県は作りっぱなし。魚道を上っている魚を見

た」ことがない。郡上漁協明宝支部の男性組合員(六〇)はあきれる。六月の解禁に向けて稚アユを放流しているが、「魚道は上らない」と必ず砂防えん堤より上流に放流する。

吉田川は長良川上流の支流。子どもらが橋の上に十六基もの砂防えん堤から涼しげな川に飛び込む光景は夏の風物詩だ。一方、急峻な山に囲まれ、総延長二十二キロの間川に沿って走る国道4度までに長良川と吉田川に十六基もの砂防えん堤72号は、さまざまな魚の計二十九カ所で魚道を



## 水路ふさぐ「土砂の堰」

道の案内看板が設置された「魚道街道」。長良川河口堰の反対運動が盛り上がりを見せていた一九九二年、危機感を強めた建設省(現国土交通省)が生態系を保護する姿勢をアピールするため、長良川と吉田川を全国に先駆け「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業」に指定した。

橋円形の水路を積み重ねる「トラック式スパイ

ラル魚道」、自然石を置

き、魚が休むスペースを

設けた「粗石付きブール

補修・新設。事業費は十億円(うち吉田川は十四億円)にのぼる。県郡上土木事務所は、ホームページで吉田川の魚道の「遡上率」を示し

県河川課の名張誠技術

監理監は、モデル事業の

結果、長良川と吉田川は「分断されているところ

はなくなつた」を胸を張

る。しかし、長良川では

事業が終了した二〇〇一

年以降、魚道がちゃんと機能しているか、一度

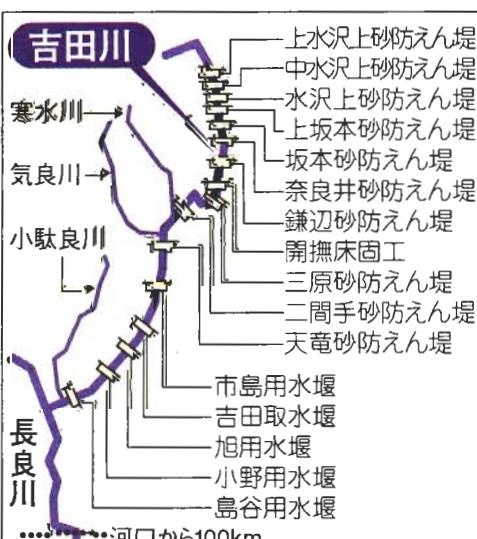
調べた数字で、魚道の

魚が実際、広い川の片

も「調べていない」とい

う。(山本真嗣)

たい積した土砂でそもそも水が流れず、魚が遡上できない奈良井砂防えん堤の魚道



# 分断の代償

りの清水川を親しみやす

ユを、十月にはアマゴを

自然の現実があつた。

くしようと水路約百㍍に放流。岐阜市は「都市の活排水も流れていが、格好の「餌場」になつたをし、上段に自然の玄関口でアユを見られるのは全国でも岐阜だけ」なかつた。人のすぐそばに川があつた。

そこには、清水川の原風景

に置してあるが、本来アユ

が食べる藻が十分つかれ、深いU字溝のよう

さんまぐ魚粉だけ。本

来は清水川にいないアマゴは、アユのシーズン以外にも施設の機能を生かすため、「遡上する魚」として選ばれた。

# 作られた自然消える魚

昨年はあつという間にいなくなつた。JR岐阜駅南口の親水公園「鮎の駅 清水川」のアユ。毎年五月、人工水路に地元の小学生が数百匹を放流しているが、昨年は放流翌日の雨で水が濁り、大半が死滅した。岐阜市が急きよ追加放流したが、今度はアオサギやカワウに食べられた。

「ほとんど生き残らんよ」。市の委託で昨年まで八年間、アユにエサをやつてきた近くの大矢武雄さん(九)は岐阜市加納清水町では寂しそうに話す。放流直後に全滅したことが、八年間で三回もあつたといふ。

鮎の駅は二〇〇〇年、JR岐阜駅南口の整備に合わせて県と岐阜市が一億五千万円をかけて設置。コンクリート二面張



鮎の駅のせせらぎ水路に放流した稚アユを眺める子供ら=岐阜市のJR岐阜駅南口で

岐阜市によると、清水川は長良川の支流にそそぐ延長一・六二㌔の小さな川。現在は、柳ヶ瀬など市中心部を流れる忠節用水排水路の水が主な水源だが、昭和の初めごろは、川底からこんこんとわき出る清水が豊かな流れを作った。

「コボツ、コボツ」と水が噴き出とつた。ハエやフナ、ドジョウ…水が冷たくてハリヨもおつた」。大矢さんは今も竹編んだ網で小魚と戯れただことを昨日のことのように覚えている。みんなが使う洗濯場があり、生

ようににわざわざ段差を設け、魚道をつくった。費用は約三百万円。高齢で上流に上ったアユは魚道の入り口につながる穴に落ち、遡上を繰り返す。稚アユは当初、魚道に引き継がれたのは、アユやアマゴが食べるはずだつた。水深が浅く、稚ア

岐阜市によると、清水川がわき出た川底もコンクリートの下に消えた。「鮎の駅」は「親水性あふれる良好な環境の場を造り出した」として国土交通省の「甦河百選」に選ばれた。そして国土交通省の「甦河百選」に選ばれた。視点はいつも、人間だけ遡上する様子を見られるた。

過酷な条件の中、日に日に消えていく魚たち。それでも「鮎の駅」は活排水も流れていが、格好の「餌場」になつたをし、上段に自然の玄関口でアユを見られるのは全国でも岐阜だけ」なかつた。人のすぐそばに川があつた。

そこには、清水川の原風景に置してあるが、本来アユが食べる藻が十分つかれ、深いU字溝のよう